



寺泊の西の入口には落水の滝がある。
横広のゆったりとした景観の滝である。
この滝の奥にかつてゴゼ宿があったとか。



北の玄関口には野積の滝がある。
水量によっては仲々男性的で勇壮な姿を見せてくれる。



関東方面からの観光バスは中ノ島インターチェンジから、又蒲原方面の宿からのバスもこの野積橋から入ってくる。今や寺泊の顔。

さよならだけが

人生だ

「花に風のたとえもあるぜ
さよならだけが人生だ」
と言いつつ切った詩人がいる。悲喜
交流の人生であるがひとつはっ
きりしていることはさよならだ
けであると。ここまで言い切つ

てしまうとあつげらんとして
いてはじめじめした悲哀や切実な
悲壮感もけし飛んでしまう。
そんな夏空が待たれることし
きりである。
この梅雨前線の停滞はなんと



最終号

したとか。新生長岡市の初夏
と言うのに。第五十七回を迎え
た両泊親善大会、市制百年記念
両泊市供交流会、市制百年記念
イベントの寺泊中央海水浴場で
この夏皮切りの砂像コンテス
トも全て雨にたたられてしまっ
た。

信濃川分水を駆け下る泥水の
激流は上流からのゴミも流木も
巻き込んで野積橋の橋脚に激突
一時野積橋は交通止めとなった。
雨の前の清澄な川面は怒怒の
形相に変貌、迫力ある写真を撮
ろうと雨に濡れた堤防を下りる
と飛沫が吹き上げてレンズは曇
り轟音が恐怖した。武田信玄が
この様を見た疾きこと水の如
しあるいは掠奪すること水の如
しと言ったかもとふと思った。

期待の港まつりも近づいてい
る。今年のサマーフェスティバル
のメインゲストは前川清、そし
て地元出身の上杉香緒里に天領
さとみ。翌七日の海上フェニッ
クス打上げも「子供達に夢をこ
の期待一杯である。早く夏らし
い天気回復に期待し海の浄化
作用で泥水と流木の海からの一
日も早い脱却を願うのみである。

さて愈々ふるさとだよりも最
終六〇〇号となった。亡くなら
れた聖徳寺前住職窪澤泰忍師の
突貫精神に引きづられ七〇号以
降の誌面に前に茫然とする思い
で、毎号毎号編集が大変だった
でしょうと労いの言葉をいつも
かけて頂き時に萎えそうになる
気持を立て直しながらやってき

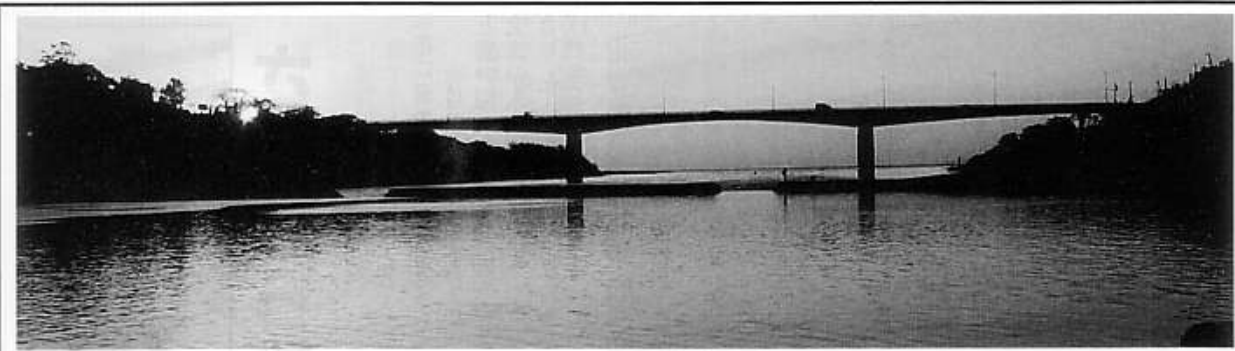
古跡聚感園を拝して

感有りて一詩を賦す

野積 井木 清

五十嵐邸鳳蓮を迎えて
順徳帝涛風を鎮め給う
義経弁慶井泉を掘る
亀田鵬斎諷詞の詩
為兼悲恋の結禰
初君女浪に託す返し歌
波瀾の生涯伊織の生
古跡菊屋に往事を偲ぶ

たのも事実であるが、思えば読
み手も又大変だったわけ毎
同じような内容になり勝ちな誌
面を二世三代にわたって読
み継ぎお一人で六〇〇号完読と
聞けば唯々頭の下がる思い申
けなさ一杯でございます。



故郷慕情

東京 五十嵐重尾

長い間、「ふるさとだより」を御発行、御送附賜り、厚く御禮申し上げます。ふるさとは、遠くにありて思うもの。と云われる身の、何よりの懐しい便りでありました。

沖に浮かぶ佐渡の島影、北の波打際に聳える彌彦山の姿、泳ぎ方を覚えさせて貰った、初夏の頃の渚の小波、そんな記憶の消えぬままに、九十年近く経ちました。消えることのない、故郷への思いです。

「ふるさとだより」の復刊される折のあることを、祈念致しております、後々の人々の爲にも。

思い出

寺泊 窪澤則子

薪ストーブの煙にむせながら、締め切り間際の「ふるさとだより」の原稿に取り組んでいた主人の姿が昨日のことのように目に浮かぶ。「い」と「え」の違いなど指摘しようものなら「寺泊の方言だからこれでよい」と申して、決して訂正しなかった。

自家用車などない時代で、長鉄と越後線を乗り継いで新潟の印刷所まで原稿を持参し、刷りあがった千部は受け取りに行った。多忙な時には私が代わって運び役をした。毎月の五、六百通の宛名書きは、主人が筆にたっぷりと墨を含ませた独特な字で猛スピードで書いた。後には私が代筆したが、初めの頃は「大将、具合でも悪いかね」とよく電話がかかってきたものである。

印刷物が届けば早速発送の作業にかかる。封筒にゴム印を押詰め、糊（初期には鍋で煮て作った）を付けて封をし、端をはさみで切る。後に便利なセロテープが出てきたときの感激は忘れられない。手伝いをした長男（現住職）と長女は今でも当時のことをよく覚えている。

頑健だった主人が痛に倒れて入院した折、幸いにも興琳寺様が肩代わりして下さった。書きなぐりの主人の文と違い、いたって洗練された文章で「ふるさとだより」を蘇らせて下さった。主人の死後は、興琳寺様を先頭に優秀なスタッフの皆様方が一月の休みもなく六百号まで続けて下さった。主人もお浄土で心から感謝していることと思う。

父の思い出

新潟 青柳成一

亡父清作は死ぬまで寺泊を愛して寺泊郷土史とふるさとだよりの発行を天職として力を尽くしました。ふる里の一本一草が迎えてくれると言って寺泊に帰るのを楽しみにしていました。俳句が趣味で毎日の生活句を即興でつくりました。古い句に元朝や大門の門開く

寺泊の立派などのお屋敷の風景を詠んだのでしょうか。生れつきの甘党で酒は一滴も飲まず六月五日、月おくれの節句の笹だんご（昔、どこのお家でもたたくさん作りました）がいちばんの好物でした。又、寺泊郷土史の続編として興味深い多くの資料を準備して

いたしましたので私もその完成を熱望しましたが天寿も尽きて七十九才で他界しました。

先日父の古い写真帖を開いて感無量。過ぎた日々は二度と戻らないが写真に焼きついた影は永久に消えることはない。十年二十年をふり返って見ればたった一日ほどにしか思えません。わたしの心は遠い想い出の中をさまよう。

寺泊温泉の大風呂に首までつかって、放心・恍惚・呆然となり、ああ極楽。極楽。死ンデモ命ノアルヨウニナンマンダブ、ナンマンダブツ。

故里の想い出

東京 佐野久治

昭和初期小学校三年生頃当時上田町と思いますが平屋建て木造の小さな学校でした。担任は長谷川ヒモ先生で、私と悪友四人で先生を罵り、廊下に二時間立たされ夕方家に帰り父母に惨々叱られ茶目氣多い少年期。

当時町内は電灯量少なう台所居間などランプで夕食と言う時代、厳冬の日本海の荒波は軒下まで波をかぶり被害も出る、道は一本道のフンドシ町の異名、裏は山、でも海の幸山の幸に恵まれた環境は素晴らしい故郷。篤に真赤な夕日が佐渡の彼方に沈む自然の美しさは忘れ得ません。当時私の家は磯町みやや旅館の筋向い山側、先般故人となられた解良謙二様とは親友の一人宮サヨ様は大の仲良し、お元気でご同慶です。雑貨店でしたので毎日両親の

手伝で近所のお得意様にお酒二合三合と届け、何となく商人の道を選ぶことになりました。

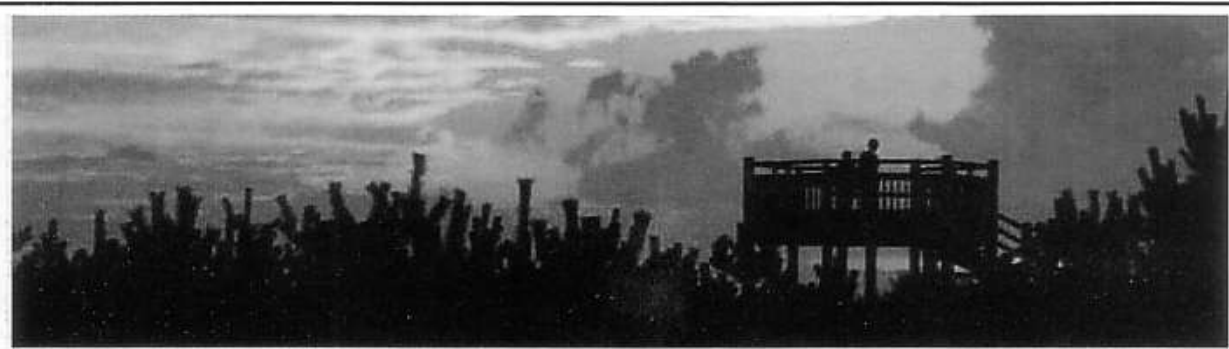
昭和八年春父の死を期に上京浅草の盛り場、現在地で呉服奉公修業、これが私の天職、日本の伝統美高級呉服専門店として現在銀座、日本橋で自営、孫が第一線で頑張っており、私は在京七十二年浅草のお観音様の地で長老として余生を町の振興に微力ながら手伝っており、八十九才まだまだ頑張ります。

今回は私まで最終号寄稿のご好意に甘え記しました。永年に亘り編集頂きましたふるさとだよりのご担当の皆様様に厚く感謝申し上げます。忘れかけた寺泊方言も聴くことが出来なくなると思うと一抹の寂しさを感じます。

美しき故郷

東京 真弓田みよ

寺泊のふるさとだよりが六百号になると知り、改めてその歳月を振り返る時正に偉業としか思えてなりません。裏方さんがおられたとしても、窪澤泰忍さんと中村興樹さんお二方の情熱と献身があったからこそここまで続いてこられたのだと思えます。又その思いが私達に温かく伝わり、あの僅か四頁の文章と写真に食いつくように魅せられていったのでしょうか。今静かに五十年の幕が閉じようとしています。心から有難うと感謝申し上げます。そして、支え続け、寺泊の発展をこよなく希ってやま



なかつた先人達、父や叔母もきつとあの世から惜しみない拍手を送っている事と思ひます。それにあの「たより」に自分の来し方を重ね合わせ、どれ程か慰められ励まされていた事かと思ひます。

私は父の後を継いだ読者で八十才を過ぎた今も心の中で寺泊は生き続けております。たまの帰郷の折は墓参のあと、小学校、磯町の愛宕様と廻りその山道を登って昔の二枚田辺りへ行きま

す。海への眺望の素晴らしさ。声を大にして言ひます。寺泊は美しいと。そしてこんな事を夢見ます。山の道、海の道とハイキングコースを作り、一日の疲れを湯宿で癒すことなどと。

郷土訪問団に参加

千葉市 五十嵐甲子男

東京寺泊会がふるさとだより発刊五年後に浅草に近い西徳寺で初代会、参加者二十数人、窪澤氏にふるさとだよりを提案資

金援助された小林源次郎氏も出席されたが、知人は窪澤氏だけで懇親会では「これでは成功者ばかりの集りか」とつい職人堅気の頑固な発言、自分はまだその日暮しの四十代の若さで漸く基盤が出来かかった頃だった。翌年は編集を助け寺泊史を連載された青柳先生他多数が出席される中で窪澤氏の計画で第一回東京寺泊会郷土訪問団に参加十何年振りかて帰郷できた。地元歓迎代表の挨拶の中で、

皆さんは東京に出て大活躍されているが、寺泊で家を守り家業を継ぎ我慢して飛躍も出来ない我々の身も察してもらいたい言葉は今も胸に残っている。

その中東京寺泊会も参加者が多くなり会場もほかに移ることになり、自分は仕事で忙しく又色々な世話役も重なり仲々出席できなくなつた。

世間に出て信用を得仕事が出来る様になることは容易な業でなく、能くなく資金もないのに大活躍など程遠いことで、動いて動いて良く頑張れたと我ながら思つてゐる。

平成元年四〇〇号記念の集いが寺泊で開催され二十五年振りに兄弟三人揃つて出席できた。海と魚で育ち頑丈な体をさづかつたが歳と共に弱さが目立つこの頃、終刊の原稿を依頼され四苦八苦、毎月の皆様のご苦勞が理解でき、ほんとうに終刊は寂

ふるさと七歳

佐野市 八十七翁 金沢定芳

発行五十年の栄光ある事象に對し、巷月の欠刊とて無く永続出来得た事は他に類例が無く、寺泊出身読者としてこんな高令迄読了出来得たことを喜びに思ひます。この間に於ける取材編集の幾多のご苦勞の程が偲ばれ感慨一入なるものがあります。思えば先人小林源次郎様の同郷人愛に燃えた愛町心に灯が点さ

れ、全国各地に同郷人会の結成を見た事は実に同慶の至りに思ひます。廃刊後に於ても、尚新らたな形でその存続が望ましいと思ひます。

ふるさとだよりと地域会は常に二者一輪の感が有つた様に思われまふ。この発展の蔭には先没された各地郷土会の役員の方々の諸兄弟の並々ならぬご努力の程が偲ばれます。

この稿末に当り重ねて取材編集のご多勞を謝し併せて發送其の他業務に参加された皆様方に満腔の謝意を表明し、寺泊ふるさとだよりの終刊を棧として万歳を三唱しこの稿を終ります。この合本

五十年の思い出

東京 下鳥ハル

我が家の宝と銘打って永く保存と子等に伝える

此の度はふるさとだより五十年おめでとうございます。これで最後になると思うと本当に寂しい気持ち一杯でございます。何か一言とのことでお恥かしいのですが昔の事をお話したいと思ひます。何しろ五十年も前の事で忘れていくことも多いのですが、一番始め窪澤さんから誘ひが来て、台東区の西徳寺様に出席しましたら、窪澤、小林源次郎、青柳清作先生と他少人数の方が集つておられました。其の時に小林さんが在京の人達に寺泊の様子を知らせて欲しいとの話が出てふるさとだよりが始まつたと思ひます。青柳先生は郷土史を載せて下

さつたようで、私は最初からの会員で其の時の頃の方々は殆んど鬼籍に入られたと思ひます。その後東京会が発足して田村会長、石垣、古川原、三上、橋本さんと今に到つております。色々なところで集りがあり、其の頃の写真を出しては懐しんでおります。めつたに帰れない私にはふるさとだよりが郷里の様子を本身に身近につたえてくれるものでした。ふるさとだよりや東京寺泊会を通しての思い出が一杯つまつております。

本当に長い間、窪澤さん中村さん又お手伝い下さつた皆様有難度うございました。

心の故郷「寺泊中学校」

新潟 嘉村 正規

寺泊中学校へ、私が着任したのは、一九四八年の春でした。私の母校、木造の寺泊尋常高等小学校の、中央の廊下から北側を飯の校舎としていました。

教職員は個性的で多士済々。生徒は士気旺盛。茶目く気満々。「坊ちゃん」のような痛快な思ひ出。「青い山脈」を地で行く出来事。啄木に似た自由奔放。「ド、ちゃん」称号恵与、光榮。学校は解放感に満ちていました。生徒の破竹の勢いに呼応して「海原清く遙かなる...」の応援歌を作詞したのは四八年の秋です。作曲は吉田吉雄先生。選手推戴式で、襷を飛ばして闘魂を高揚、体育館で雄叫び歌つた場面が目に残つて来ます。衣類、履物は無く、空腹の為、運動会も遠足も出来なかつた敗戦直後の新制中学校の草創期。



日没の時間帯が遊漁船出港の時でもある。
今年は烏賊漁が仲々好調らしい。
イカはあまり好き嫌いがなく万人向きの食材。



丁度今頃が寺泊沖合に烏賊が集っているらしく、日没と
共に集魚灯の光が競い合う。
ベテランは100匹以上も釣り上げるようだ。



夜中11時半頃から帰港で港は再び賑わう。
満灯の船の灯りで港は真昼を思わせるほど明るく、専ら
話題は今日の漁果。

困窮の中でも、師弟共に「知」に飢え、探求意欲は旺盛でした。放課後、僅かの図書を廊下の一角で開放。耽読していた生徒たちの輝いた瞳が印象的です。自治意識も高まり「学友会」選挙は大人顔負け本格的でした。「あらなみ新聞」発行は四九年。独立自尊、部員は取材と編集に一心同体。回想して感慨無量。当時の生徒の皆様は、既に古希を迎え、一緒に汐見台校舎へ移った皆様も還暦を過ぎました。創立当時の寺泊中学校での私は、桃源郷に坐す気分、日々没頭。有難うございました。

余所もんから土地もんへ

荒町 土田 明
私はいわゆる「よそもん」です。

長岡宮内から寺泊に赴任したのは長男が生まれた昭和二十九年初で開校。気さくな近所の方々との会話は、「がーことばの長岡ざいご」で育った私には、大声で話される寺泊弁が半分も分からず、「でいがんだ」「とっべつもねえ」などと寺泊弁は難解でしたが次第に意味がわかってくると、なかなか親しみやすくあつたかい気持ちにさせてくれたことはおぼえるようになりました。その後ほとんど「ふるさとだより」を頂戴し、寺泊を大切になさっている内容のあたたかさ、そして記事に相応しい何とも言えない「寺泊弁」の親しみやすさに素直に感動したものでした。寺泊から都会に出て成功された多くの方々が、この寺泊で

書かれた「ふるさとだより」を待ち望み且つふるさとを懐かしんでおられるかは「よそもん」の私にも容易に想像が付きません。お世話になっていた寺中は体育館が出来たばかりで「緑の松の丘の上」の校歌に相応しいスポーツの盛んなモラールの高い学校でした。情熱あふれるユニークな先輩教師がいろいろな意味で大きな影響力を発揮しておいででした。

時移り寺泊に住みついて半世紀、悔いる前非のみ多い日々を送りつつも、「はまなす」で町の芸術文化の一端に関わりながらようやくこの地にご縁をいただく「寺泊の土地もん」になれたかと。駄文を弄している最中に六九九号が届きました。次

幼なじみの友は

燕市 小坂井のりを

号で最終号になるとのこと、お名残惜しいことです。窪澤様中村様、長いこと地域から地域への発信お疲れ様&ありがとうございました。その後兄（三上幸雄）の紹介で寺泊短歌会に参加させて頂きウソのような幸福感に浸ったものでした。しかし私の病気の為寺泊まで行くことが出来ず退会せざるを得ませんでした。今私も八十才近い老人になり様々な病気にかかり伸吟していません。然し兄夫婦も亡くなり心のよりどころもなくなりましてが、故郷への思いはかえって強くなっておりまして。今年八月二十日に菩提寺の法福寺様に兄夫婦の法要があり参加しますが、それが私の帰郷の最期になるのではないかと考えています。車に乗せて貰えばアット言う間になつかしい大町の一軒一軒の名前も吹きとんでしまいます。



なつかしい聖徳寺前住職のご健在だった頃の姿。
思考や言葉よりも行動力先行で、労を惜みまずふるさと
だよりを育てて下さった。



そのあと引き継いで何とか50年600号まで漕ぎつけた
のもお互補い合っつの中村・佐藤のコンビ編集人。



書き手もさることながら、読み手あつてのふるさとだ
よりである。1号から600号まで完全読破。
東京会皆勤の下鳥ハルさん。(400号記念会)

幼なじみの友は
如何に在すか
声かかるとまもなく
すぎてゆく
ふるさとだよりの皆様長々お世
話になりました。

古希を迎える中で

富山市 久住 吉雄

先日、我々寺中二六年度卒の
同期会「古希の集い」が町内在
住の諸兄諸姉のお世話で開催さ
れ、この歳になつても元気で参
加できた幸せに感謝するばかり
である。振り返れば半世紀余、
ほとんどの者は十五、六才の年
令でふるさとをあとにして「旅」
に出た者である。親元からいき
なり異郷の地に放り出されて、
時には親を想い、ふるさとを偲

んで涙する夜もあったことであ
ろう。
ここに集ることのできた一人
ひとりには七〇才まで生きてき
た歴史があり、その足跡は一晚
二晩で語りつくせないが共通す
るものは「ふるさと寺泊」であ
り、この海と山のはざ間で育ち
学校で過ごしたあの日の時の
想い出であろう。

時代の流れで海辺の風景も大
きく変わり帰省の度に驚くばかり
だが、脳裏に焼きついている場
面は消えていない。
そのふるさとの四季折々の風
景を毎月届けて頂き、温もりと
励ましを頂いた「ふるさとだよ
り」も今号で終刊となる。
また一つのふるさとが消え去
り愛惜に耐えないが、これもひ

とつての歴史として受容しなけれ
ばならないのであろうか。
しかし、残された本誌六〇〇
号の記録は後世まで残る貴重な
史料だと確信する。
この偉大なる業績を最後まで
やり遂げられた各位に深甚なる
敬意と感謝を申し上げます。

小林初代会長と誌友たち

東京寺泊会 橋本寛二

ふるさとだよりが創刊された
昭和三十一年は、神武景成で戦
後意識が益々薄らぐ高度成長へ
突入し、大田区桃谷の機械関連
会社「小林源産業」も社員百人
を目指し活気溢れた。コバゲン
の愛称を持つ小林源次郎社長は
「ふるさと寺泊」を強烈に愛し、
同郷者の自社就業を歓迎した。

昭和申頃迄の都会人は、望郷意
識が半端でなく、「別れの一本
杉」や「哀愁列車」などがラジ
オにより増幅され、故郷と都会
の距離が歌になった。小林氏は
帰省の度に「マチの臭いを在外
同志に伝える便り」の発刊に向
け、聖徳寺住職にハッパをかけ
続け、夢が叶ったのはその二年
後、還暦の秋であった。相撲好
きな社長は、千秋楽に鏡里が吉
葉山を破り三場所振りに優勝し
上機嫌の時、待ち焦がれていた
創刊号が届いたのである。本文
五三三文字を幾度も読み返す。
その晩早速、在京仲間へ電話を
し、「オイふるさとだより読んだ
か」。反応を伺う。仲間達を誌
友と呼び、翌春には上野・西徳
寺で第一回「東京誌友会」を開

催。これが小林氏を初代会長と
した「東京寺泊会」の源流で
ふるさとだよりと共に歩んでき
た。初回から参加し、今年米寿
を迎えた大田区蒲田在住の下鳥
ハルさんは、半世紀前を懐古す
ると若輩者の私の訪問を、常に歓
待して下さる誌友は、ふるさと
だより六百号全巻を読破し、東
京寺泊会にも皆勤出席中。

終刊に寄せて

東京 三上 喜久治

ふるさとだよりの、愛読者とな
り、ついに最終刊に到達した
のかと思うと、感無量なるもの
があります。
私の場合、昭和六十二年に東
京寺泊会の存在を知り、古川原



かつて野積海岸の名勝立岩も陸にあがって久しい。
浦浜への遊覧船がこの島を巡った時代もあったのに。



夏戸から木島へかけての一部は排水で苦勞する場所。
郷本川の改修と隧道川の改修でよほど改善されたのだが
今回の大雨でかくの如し。（夏戸小学校前の田甫）



猛烈な激流がまさに押し合いへし合いと言う恐ろしい形
相で河口へ流れ下る。
ついに野積橋は一時通交止めとなった。

会長さんに期日直前ですが、電話をしまして、初めて出席してからの読者ですから、まだ二十年に達しておりません。
然し発刊四十周年記念会に出席させて戴いた時は、流石に大勢の参会者で記念写真も一緒に撮影出来ず、二班に分けての撮影になった事は、如何に愛読者が多いかと驚いた事でした。
其の間、私も東京寺泊会に關わる様になりました。有難いながらも、私のような存在が有難かつたかと痛感しているところがあります。中村さんと同級生の甘えも有りましてしどんな事でも、相談が出来た事も嬉しく思っている次第です。
ところで終刊に際し、よくも五十年間続けられたことが不思議

六〇〇号記念…寿ぎまじる

東京 田尻 加代子

五十年という長い年月、寺泊の情報を発信し、多くの人々の心に明りを点し続け、立派にその使命を果たした「ふるさとだより」閉刊を一抹さみしく思いつつ、これまで発刊にご尽力下さった歴代の関係者の皆々様に、

心より感謝を申し上げます。思い越せば団塊世代の私は、当誌とのご縁は十数年と浅く、東京新潟県人会本部の月刊誌「新潟県人」シリーズ「魅力いっぱい我がふるさと」の取材を担当。訪町の折、中村興樹様にお会いしたことが切掛でした。取材は高橋誠町長のインタビュー・懇談会・町の主要施設の視察等。生まれ育った寺泊町の由緒ある歴史や伝統文化、現況等を今更のように認識できたことが、懐かしく思い出されます。取材を機に、東京寺泊会と東京新潟県人会の交流が発足。現在、橋本寛二様、中村信也様が本部の一翼を担い、活躍の途上に在ることを心強く思います。歴史の変遷と共に新しい潮流

寺泊に心を寄せて

東京 竹内 瀧子

歴史のある寺泊の名が合併で消えなくて良かったとの思いを強くしたのが、去る六月十日の還暦記念祝賀会だった。四十五年前に寺泊中学校を卒業した仲間七十一名が、まさに「寺泊」を軸にあちこちから集

った。白山媛神社でお祓いし、住吉屋で祝杯をあげた。人生八十年としたら、その四分の三を生きたことになる。しかし久しぶりに会った皆はまだまだ人生の現役、気も若い。ひとつやふたつは病気をしたり、痛み膝を撫でてみているが、交わす笑顔は昔のまま。親の遠距離介護や身近な人の喜びと哀しみ、子や孫の話にそれぞれの話し手の大切な日常があった。別の輪に入る、合併による町の恩恵と損失を語る人が居た。同期で二人の市会議員が活躍するせい、か、町の活性化には我々の関心が自づと高まっていく。「高速船を大いに宣伝したらいいよ」とか、「魚のアメ横に頑張ってもらうしかないさ」など



と言いながらビールを注ぎ合っ
た。カラオケで歌う仲間の演歌
が昼間なのに妙に心に沁みたり
した。

合併で今後寺泊は各分野でさ
まざまに変化していくのかも知
れない。故郷を離れている者に
は日々の移り変りは見えないが、
歴史や文化を誇りにしながら、
長岡市の海の玄関として新たな
発展をしてほしいと願う。

故郷の風を運んでくれた 「ふるさとだより」に感謝

上田町 深滝 弘

昨年末で満七十七歳を迎えた
人生を振り返ってみますと、寺
泊小学校六年卒業時に最初の離
郷をし、それから十二年間は
異郷の地で過ごし、昭和二十八
年に転勤で郷里へ戻り、その後
二十三年間は寺泊から新潟まで
の通勤生活を続け、昭和五十年
末に二度目の離郷の後、十八年
間を再び異郷で暮しました。

平成六年に常勤的な職務から
解放された後は、毎年春、秋を
郷里で暮し、冬が近づくと最終
勤務地であった房総半島外側の
町へ移住越冬するという「渡り
鳥」のような生活を始めて、は
や十三年目。したがって、今で
も一年のうち約三分の一の期間
は異郷の地で暮しております。

そんな私にとって、特に異郷
に住んでいた期間には、毎月届
けていただく「ふるさとだより」
が、一つの大きな心の拠りど
ろでした。平成七年二月開催の
「東京寺泊会四十周年記念大会」
を契機に、首都圏在住の寺小
代の男女同級生ができるだけ多
く集ろうと声をかけあって、久

しぶりの再会を果たしたのも
「たより」のお陰でした。
その「ふるさとだより」が、
この六百号で五十年の幕を閉じ
るに際し、寄稿依頼を受けたの
を機に、中村さんや故・窪澤さ
んをはじめ編集担当各位に対し
「長い間有難うございました」
と厚く御礼を申し上げます。

終刊号に寄せて

さとうのぶひと

梅雨前線が停滞し、降ったり
止んだりの曇天。からりと晴れ
上がった夏空が広がるまではま
だ時間がかかりそうです。地球
温暖化や生態系の異変などが伝
えられつつも、大ざっぱなこ
ろでは、自然はちゃんと動い
ています。人間の計り知れぬ大い
なる摂理（知恵）でしようか。
季節のサイクルを眺めながら少
しほつとしていきます。

さて「ふるさとだより」も最
終号です。一抹の感慨に囚われ
ふとセンチメンタルリズムに陥っ
ています。レギュラーとなつて
記事を書き始めて九四年、こう
して書きつないでこれたのは読
者の皆様のおかげです。ありが
とございました。締め切りが
近づき、あわてて原稿を書き始
めた時、いつも諸兄姉の暖かい
眼差しを感じていました。

四季の移り変わり、年中行事、
人事、史跡や郷土史——政治と
商売以外で寺泊のことなら、何
を書いてもいい。「ふるさとだ
より」発行の趣旨は「ふるさと」
寺泊の現状をいかに判りやすく
伝えるか、でした。ところがわ
たしは、それらの記事を書くこ
とがまったく不得手な記者だっ

たのです。
それで最初は、できるだけ取
材を心懸けました。「取材」な
ど大げさな、と言う向きもあろ
うかと思われます。しかし、毎
月書くというのはけっこう「煩
繁に」書いていく、という体感
があり、取材をしないと何を書
いたらいいのかわからなくなり
てしまふのです。窪澤前編集
人も、中村編集人も、取材に裏
打ちされた立派な記事を書いて
います。

「足で稼ぐ」とはよく言つたも
ので、怠け者のわたしにはこの
取材の「行」が続きませんでした。
いきおい身辺雑記やエッセ
イ風の軽い読み物にならざるを
得ません。

きちんと取材もしないで、と
読者諸兄姉には申し訳がたたぬ
思い一杯でしたが、ある時か
ら考えを変えました。開き直つ
て「自分にはこれしか能がない
のだ」と思うようになったので
す。そうすると気分が晴れ、再
び書き続ける力が湧きました。

今年には市町村合併の年でし
た。一月からこの寺泊は、長岡
市になりましたが、その年に「ふ
るさとだより」が終刊になると
いうのは、一種象徴的な出来事
のように思われます。寺泊とい
う地域の個性がますます薄ま
っていきような危惧を感じるか
らです。

「わが故郷」が
希薄になったような。この妙な
居心地悪さはしばらく続くので
しようか。
長岡市になったから「ふるさ
とだより」はその役割を終えた
というのではありません。長岡
市になったからこそ逆に、寺泊
の個性を伝える「ふるさとだよ
り」のような地域広報紙が必要
なのです。という意見もあるくら
いですから。

IT化時代の波に逆らつた、
昔ながらのマニユアルな情報伝
達方式は限界にきていることが
一つあるでしょう。電子化され
た情報は場所や時間を選ばず、
いつ、どこでも入手可能です。
かつて、旧世代のジャーナリ
スト大宅壮一は「新聞は刺身、
週刊誌は干物、月刊誌は缶詰」
と言つたことがありました。こ
の区分でいうと「ふるさとだよ
り」は缶詰になるのでしょうか。

缶詰にももちろん美味しいも
のがあります。年中行事の報告
などは人気商品の一つであつた
と言えるでしょう。しかし、そ
れを心待ちにし、美味しさと味
わつてくれる世代が減つてしま
いました。世代交代には勝てま
せん。

「老兵は去るのみ」といつたと
ころでしようか。いまさらじた
ばたしても始まりませんが、残
念の一言です。
故窪澤前編集人からはかわい
がっていただきました。悪気は
ないのですが、何かと誤解を受
けやすい記者であつたわたしを
「寄らば大樹の陰」ならぬ「興
樹の陰」に避難させてくれた中
村編集人に感謝いたします。

小波会七月旬会詠草

兼題 虫干・百合他当季

佛や 曝書の父の背の丸く

外山 海子

虫干しや 家紋は白紙当ててあり

能登 頑牛

捨て難し

兄の形見の土用干

外山きよし

檀安吾

大宰全集曝しけり

加勢 白汀

虫干しや

箆箭の底に尺物差

江原 汀子



市制100年のイベントの一環に寺泊中央海水浴場での砂像コンテスト。
あいにく当日は時々小雨の天候であったが雨天決行。

虫干や

母ののこせり畳敷

内藤 蓮子

朝まだき

風すがしきて百合薫る

広瀬 洋子

モーツアルト

流れる窓辺百合の花

大越碧水子

留守宅の

奥より匂ふ百合の花

水沢 蕉子

わが庭に

かの山中の姫小百合

小島 温石

四恩会とふ

掲示ある寺夏椿

中村 流瓢



この建物に見覚えは？ 特に町のご婦人方ではお世話になられた方が多いのではないのでしょうか。
大町の涌井医院ドクター御高齡の為6月一杯で閉院。

象餓死の

戦時のはなし沙羅の花

小島 冬扇

広々と

襖はずして大の字に

竹内 霍山

誌代御後援(敬称略・順不同)

東京都 寺坂 一清 金三千元

渡辺 宏平 金五千元

佐野喜久雄 金五千元

久野 久治 金一万元

故松井 武正 金五千元

佐藤 寛子 金三千元

茅ヶ崎市 家老 淳子 金三千元

富山市 久住 吉雄 金五千元

朝霞市 金澤 定芳 金三千元

札幌市 松本 典子 金三千元

富吉見市 外山 雅章 金五千元

あとがき

いつものことながらついに最終号も発行日の過ぎた二十一日になりました。今後のふるさと情報の発信は編集スタッフの一人である小川さんのホームページにアクセスして下さい。
さえずりの広場 from 寺泊

http://www.2s.biglobe.ne.jp/~taka55/top.htm

合冊本の申込みや終刊パーティ参加申込みは七月末日としましたが一応の目安の為に早く切ったのでお盆頃まで受け付けます。合冊本もなるべくよい物



水族館前から弥彦山方面を望む展望。
盛夏の週末には県内外からの車が連なって大渋滞になる日も近いのでは。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中村 興 樹

発行人 中村 興 樹

発行所 新潟県寺泊町

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二一九番

振替番号 〇〇六二〇一三五七四五

印刷所 吉野印刷株式会社